

念仏の僧伽の再興を願って

宗務総長
但馬 弘



みなさまとともに、本年の真宗本廟報恩講のご縁に会いえたことに心から感謝いたします。

宗祖親鸞聖人がこの世に生まれ、法然上人をはじめ様々な方々との出遇いをおし
て、お念仏の教えに帰依し、御生涯を閉じられてから、本年度で七百五十六年の歳月を経
ました。

人として生まれ、多くの苦しみや悩みを抱え、大きな壁にぶつかり、悩み抜かれた親鸞聖
人。聖人の御一生は、まさに「生きるということとは、どういうことなのか」という、私たち一
人ひとりが抱える、根本的な問題と真向かう歩みであったのではないのでしょうか。

おのおの十余か国のさかいをこえて、身命をかえりみずして、たずねきたらしめたまう御こころざし、ひとえに往生極樂のみちをといきかんがためなり。

『歎異抄』（東本願寺出版発行『真宗聖典』六二六頁）

そして、険しい山河を越え、各地から親鸞聖人を訪ねてこられた御同行の思いもまた、「往生極樂のみち」を問い、聞かんとするものであり、その背景には、幾星霜経た現代も変わらぬ「生きること」への問いや不安が横たわっていたのでありましょう。そのような御同行も、共に苦悩される親鸞聖人の御姿に出遇われ、仏に手を合わせ、大切な一日一日を過ごし、力強く生きられたに違いありません。

あまりにも疾い時代の変動に翻弄されながら生きています。知恵あるがゆえに、自分の思いに固執し、聞き抜き問い直そうとしない愚かさ。そして、愚かと気づかされても、それで利口になったつもりになっているどうしようもない私。

親鸞聖人はこれを人間の「闇」として言い当てられています。この闇はますます深まるばかりかもしれませんし、悲しくも人間の力ではこの闇を拭うことはできません。

しかし、そのような無明の闇を抱えて生きざるを得ない私たちのところにこそ、如来（真実）の光が届けられ、わが身を照らし出し続けているのです。

無明長夜の燈炬なり

智眼くらしとかなしむな

生死大海の船筏なり

罪障おもしとなげかざれ

「正像末和讃」（同『真宗聖典』五〇三頁）

お念仏を申すことで、他でもないこの愚かな私一人の存在の救いこそが、如来本願のお目当てであったということを、親鸞聖人の求道の歩みから教えていただいています。

世界中で頻発する紛争、テロをはじめとする人間同士の憎しみの連鎖を断つことは、悲しくも困難ですが、この現実のなか、私たちは念仏の僧伽の再興を願います。

宗門では、二〇二三年にお迎えする「宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要」に向けた具体的な歩みが始まっています。この報恩講を毎年の節目として、お念仏の教えと先人の願いを胸に、すべての人々と共に、あらためて南無阿弥陀仏と念仏申す生活を始める機縁としていきたいと思えます。